

言った。「お金が要るんだ」

「それならこのりんごを売りなさい」と木は言った。青年はりんごを全部もぎとって行ってしまった。木はうれしかった。

また久しぶりにやってきた。かつての坊やはいいい大人になっていた。「結婚したい。子どもが欲しい。だから家が要る」木は言った。「この枝を切って、それで家を建てなさい」。男は枝をすべて切って持っていった。木はうれしかった。

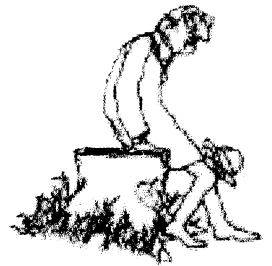
さらに月日は流れ、かつての坊やは中年になっていた。人生にいいことがなかったようで、「遠くへ行きたいから舟がほしい」と言い出した。「幹を切って舟を造ればいい」。男は幹を切り倒し、船を造って行ってしまった。「それでも木はうれしかった」とその後に、「だけどそれはほんとなかな？」と書かれていた。重く心に残る一言だった。



そして、かつての坊やは老人になって木に会いに来た。しかし、もう木はあげるものがなかった。

老人は言った。「もう欲しいものはない。ただ座って休む場所があればいい」「それじゃここにお座りなさい」と、木は思いっきり背伸びして切り株になった自分を差し出した。

あとがきに、訳者の本田錦一郎さんが『無償の愛』について書いていた。与えて、与えて、さらに与えていく。それは「犠牲」ではなく、『無償の愛』なのだ、と。



あれから30年以上経った。ふと、この絵本を思い出した。きっかけは知り合いの夫婦から息子さんの話を聞いたことだ。

そのご夫婦はとても仲が良く、特にご夫人はとても優しい女性で、夫が自損事故を起こしても、「疲れていたのね」と労い、夫が無駄遣いしても「仕事のストレス発散になるからいいね」と微笑む。一人息子に対してもそんな感じで、いつも笑顔で、愛情をたっぷり注いできた。

その息子も20代後半になった。息子は仕事から帰ってくると部屋にこもり、ゲームばかりしている。父親とはほとんど口をきかない。部屋から出て来ないときは母親が部屋まで食事を運んだりする。息子が育ち上がっていない。なぜ？あんなに仲のいい夫婦なのに。あんなに愛情あふれる家庭で育ったのに。それがとても不思議だった。

『おおきな木』を思い出した。学生ときは愛を受ける立場で読んでいたことに気付いた。今、与える立場になって考えさせられる。優しさだけではダメなんじゃないか、と。

1976年に本田さんの和訳で出版されたこの絵本は日本でもベストセラーになった。そして2010年、作家の村上春樹さんの新しい和訳で再版された。

「木はうれしかった。だけどそれはほんとなかな？」という部分を、村上さんは「それで木はしあわせに・・・なんてなりませんよね」と言い切った。確かに絵を見ても、物語の展開をたどっても、与え続けた木は幸せになっているようには見えない。なぜなら、かつての坊やが幸せになっていないからだ。

無償の愛は確かに尊い。しかし、誰かの成長を願うとき、「与え続ける行為は、もらい続ける人を育てない」と、この絵本は訴えているのではないだろうか。それで原著では、作家のシルヴァスタインは年をとっていく男を最後まで「ボーイ（坊や）」と呼び続けている。

絵本は、その時の気持ちや立場や年齢などに応じて、いろんな受け止め方ができる。だから大人も楽しめるのだろう。